摂州住藤原聾長綱

岐阜県・長尾充恒

はじめは、私は刀剣研究会に入会してようやく 3 年目。最初は携帯用刀剣鑑定手帖が刀剣研究会開催の時に持っていかなければならない。その内に『聾長綱』の記載があって全く知りませんでした。そして昨年、鑑刀秘書を読みながら『聾長綱』を発見し、『聾』の姓名でなはいか？疑いと思って熊本県支部・山田晴比古さんにお伺いし、『障害を持つ鍛冶』の回答を判明した。それにきっかけで『聾長綱』の追跡研究が始まった。摂州住藤原聾長綱の銘を切る証拠は確かですが、現在に作刀数本がわずか少ないし、作刀の講評資料関連は少ない。他、入門、鍛錬道場、略歴等の詳細は資料に残っていない。

日本美術刀剣保存協会・調査課　檜山正則氏から回答　（平成１７年９月１３日）

(質)　明治に入る時、廃刀による消失ではないか？
(答)　確かに、廃刀令により日本刀を携帯することが出来なくなり、当時刀鍛冶の殆どが廃業に追い込まれた事実はあり、そのうちの何割かは、海外へ持ち出されたとしても、長綱だけが極端が少なくなるという現象は考えられない。

(質)　戦時中、Ｂ－２９で消失したのではないか？
(答)　戦時中の空襲や原爆などにより、刀剣以外にも多くの美術品が消失しているが、特定の作者の物だけが失われる事は考えられないので、この信憑性が少ない。

(質)　敗戦後ＧＨＱ最高司令より、刀剣を投棄したのか？
(答)　敗戦後ＧＨＱにより日本刀が接収され、海洋投棄されたり、アメリカに持ちでされたりしているものもあり、一部は赤羽(東京の赤羽の米第８軍兵器補給敞)として残ったものはあるが、それが原因とも言えない。

(質)　現在にも、盗難、オークション等ではないのか？
(答)　この件に関してはその実態を把握してないので答えようが無い。

(質)　個人蔵による、後継ぎ者へ口頭していなかったか？
(答)　この件に関してはその実態を把握してないので答えようが無い。

刀剣研究会霜華塾・講師　佐藤氏から回答　（平成１７年９月１８日）

(質)　『聾長綱』作刀数本が少ない原因は？
(答)　約２００本だと思います。　例に言いますと一竿子忠綱の作刀約８００本位。
最高は１万本以上作刀した鍛冶がいます。(近江守助隆・新々刀)
チェック方法は都道府県各教育委員会に問い合わせみては？というアドバイス。

まとめと今後調査
(財)日本美術刀剣保存協会には銃砲刀剣類登録申請ではありませんが、刀剣研究、刀職技能講習会、保存・特別保存審査(重要保存、特別保存、国宝)などの運営活動である。銃砲刀剣類登録申請は各県教育委員会である。それによって『聾長綱』の登録データがあると考えられます。今後、詳細についての調査を進めたい。

摂州住藤原聾長綱の系統と作刀講評

◎系統

初代粟田口藤原忠綱　　（寛永）
　本国播州姫路、姓浅井氏、京に移り後大阪に移住す。一説に山城粟田口国綱の末流ともいう。先に近江大掾、後近江守を受領。　時代寛永頃。

↓

粟田口一竿子忠綱　（元禄）
　初代忠綱の子、姓は浅井、名は萬太夫、号一竿子、合戦軒と唱う。近江守を受領。時代は延宝、天和、元禄、宝永、正徳頃。

↓

摂州住藤原聾長綱
　初代忠綱(一竿子忠綱)門、通称北村一右衛門、聾者なるゆえか、銘の中に「聾」の一字を切り添えたものもある。

●講評
　彼は聾者なりしを以て中心にも自ら聾長綱と切る、其性の瓢逸なりし事思ふべし、其作上手といふ程にもあらざれど、何となく世外に超然たる風ありて、當時の大阪物らしからず、作物が幾物にても人格を表現するものなりとすれば、彼の作に於いても亦自ら障者らしく、然して何處か偏屈らしき所を認むべし、瓢々平たる面目躍如す。

●系統
　初代忠綱の門人、北村市右衛門といふ、時代寛文より元禄、師忠綱との合作もあり作風も似たるものなれば、一竿子よりは年長じたるなるべし。　猶同門に正綱、包綱などあれど作柄似たるものなれば略す。

●恰好
　鎬造り多く棒樋を丸止めにしたるもあり、反り浅く身巾狭さもの多し、脇差より刀比較的多し。短刀は未だ見ず、切先小にして庵棟なり。

●地鐵
　黒ずみて板目柾かかるものあり、好くつみて光り強さものあり、鎬地は必ず柾なり。彫物あり頗る上手にして一竿子の如く出来たるものあれど、之恐らく自身彫にあらざるべしと思はる非か？

●刃文
　直刃に小沸好くつきて誠に好く出来るあり(正綱、包綱も然り)、丁子乱は頭好く揃ひ匂足長くしてわざとらしく、世に之を足長長子といふ、一見甚鑑別し易きものなり。

●銘文
「摂州住藤原長綱」「摂州住藤原聾長綱」「藤原聾者長綱」

街道と国

本州・四国・九州をわけて古来五畿七道という。五畿というのは畿内五ヶ国の意である。七道は七つの街道筋のことである。

これらの街道は今日一般には必要のないことであり又今日の電車路線などに用いている東海道線とか山陰線、山陽線などいっても昔のそれとは多少の相違いがある。刀剣鑑定の上ではこれを知ることが是非必要なことである。

これは単に入札鑑定上に必要なばかりでなく事実同一街道の刀工の作風には争い得ないところがあって刀剣研究上欠くべからざるものがある。しかしどこの国にも著名な刀工があるとは限らないが次に略図を加えて街道と国名を述べ、古刀工のあるところは(古)、新刀工のあるところは(新)の印を加えて区別することにした。

畿内　(五ヶ国)			
山城　(京　都)　(古・新)	大和　(奈　良)　(古・新)	摂津　(大　阪)　(新)	河内　(大　阪)　(古)
和泉　(大　阪)　(新)			
山陽道　(八ヶ国)			
播磨　(兵　庫)　(古・新)	備前　(岡　山)　(古・新)	美作　(岡　山)　(古・新)	備中　(岡　山)　(古・新)
備後　(広　島)　(古)	安芸　(広　島)　(新)	周防　(山　口)　(古・新)	長門　(山　口)　(古)
山陰道　(八ヶ国)			
丹波　(京　都)　(古) (兵　庫)　(古)	丹後　(京　都)　(無)	但馬　(兵　庫)　(古)	因幡　(鳥　取)　(古)
伯耆　(鳥　取)　(古)	出雲　(島　根)　(古)	石見　(島　根)　(古)	隠岐　(島　根)　(無)
南海道　(六ヶ国)			
紀伊　(三　重)　(古・新) (和歌山)　(古・新)	淡路　(兵　庫)　(無)	阿波　(徳　島)　(古)	讃岐　(香　川)　(無)
伊予　(愛　媛)　(新)	土佐　(高　知)　(古・新)		
東海道　(十五ヶ国)			
伊賀　(三　重)　(古)	伊勢　(三　重)　(古・新)	志麻　(三　重)　(無)	尾張　(愛　知)　(古・新)
三河　(愛　知)　(古)	遠江　(静　岡)　(古)	駿河　(静　岡)　(古・新)	伊豆　(静　岡)　(無)
甲斐　(山　梨)　(無)	相模　(神奈川)　(古・新)	武蔵　(東　京)　(古・新) (埼　玉)　(古・新) (神奈川)　(古・新)	安房　(千　葉)　(無)
上総　(千　葉)　(無)	下総　(千　葉)　(無)	常陸　(茨　城)　(古・新)	
東山道　(十三ヶ国)			
近江　(滋　賀)　(古・新)	美濃　(岐　阜)　(古・新)	飛騨　(岐　阜)　(無)	信濃　(長　野)　(新)
上野　(群　馬)　(無)	下野　(栃　木)　(古・新)	磐城　(福　島)　(新)	岩代　(福　島)　(新)
陸前　(宮　城)　(新)	陸中　(岩　手)　(古・新)	陸奥　(青　森)　(古)	羽前　(山　形)　(古・新)
羽後　(秋　田)　(新)			
北陸道　(七ヶ国)			
若狭　(福　井)　(古)	越前　(福　井)　(新)	加賀　(石　川)　(古・新)	能登　(石　川)　(無)
越中　(富　山)　(古)	越後　(新　潟)　(古・新)	佐渡　(新　潟)　(無)	
西海道　(九ヶ国)			
筑前　(福　岡)　(古・新)	筑後　(福　岡)　(古)	豊前　(福　岡)　(古) (大　分)　(古)	豊後　(福　岡)　(古・新) (大　分)　(古・新)

肥前　(佐　賀)　(古・新) (長　崎)　(古・新)	肥後　(熊　本)　(古・新)	日向　(宮　崎)　(古・新)	大隈　(鹿児島)　(新)
薩摩　(鹿児島)　(古・新)			

古刀・新刀著名刀工国別一覧

(注)　平＝平安時代　鎌＝鎌倉時代　初・中・末＝初期・中期・末期　吉＝吉野時代室＝室町時代　桃＝桃山時代　江＝江戸時代　幕＝幕末時代　明＝明治時代

古　刀	新刀
畿　内	
山　城 ・三条系　宗近(平)　吉家(平)　五条兼永(平)　国永(平) 吉則(鎌末～室) ・粟田口系　国友(鎌初)　久国(鎌初)　国安(鎌) 国清(鎌初)　有国(鎌初)　有国(鎌末)　国綱(鎌中) 則国(鎌中)　国吉(鎌中)　吉光(鎌中)　国光(鎌中) ・来系　国行(鎌中)　国俊(鎌中)　来国俊(鎌中～末) 来国光(鎌末)　来国次(鎌末)　来光包(鎌末) 来倫国(鎌末)　来国真(吉)　了戒(鎌中) 了久信(鎌末) ・長谷部系　国重(吉)　国信(吉)　国平(吉) ・信国系　信国(初代・二代吉、三代以下室) ・綾小路系　定利(鎌中)　定吉(鎌中) ・平安城系　光長(鎌末)　長吉(室) ・鞍馬系　吉次(室)　重次(室)	京 ・埋忠系　明寿(桃)　東山美平(江) ・堀川系　信濃守国広(桃)　国安(桃)　出羽大掾国路(桃) 越後守国儔(桃)　大隈掾正弘(桃)　平安城弘幸(桃) 阿波守在吉(桃)　藤原広実(桃) ・三品系　丹波守吉道(桃～江)　伊賀守金道(桃～江) 越中守正俊(桃)　同二代(江)
大　和 ・当麻呂系　国行(鎌末)　国清(吉)　国友(吉) 有俊(鎌末) ・手掻系　包永(鎌末)　同二代以下(吉～室) 包清(鎌末～室)　包吉(吉～室)　包俊(室) 包真(室)　包行(室) ・尻懸系　則長(鎌末～室) ・保昌系　貞継(鎌末)　貞吉(鎌末)　貞宗(鎌末) 貞清(鎌末～吉)　貞興(吉) ・千手院系　千手院(鎌末～室)　康重(鎌末)　長吉(吉) ・龍門系　延吉(鎌末) ・金房系　政次(室末)	
摂　津 ・来系　来国長(吉)	大　阪 ・国貞系　和泉守国貞(桃)　二代国貞(江)　北窓治国(江) ・国助系　河内守国助(桃)　同二代国助(江) 肥後守国康(江)　伊勢守国輝(江) ・助広系　摂州住助広(江)　越前守助広(江) 近江守助直(江) ・大和系　越後守包貞(江)　二代越後守包貞(江) 坂倉言之進照包(江)　陸奥守包保(江)　右陸奥(江) **・忠綱系　近江守忠綱(江)　二代近江守一竿子忠綱(江)** **壟長綱(江)** ・石堂系　多々良長幸(江)
河　内 ・三条系　有成(平)	
和　泉 ・加賀四郎　資正(室)	

	・月山系　月山貞吉(幕)　貞一(幕～明)
山　陽　道	
備　　前 ・古備前系　友成(平)　友成(鎌中)　宗安(平)　友安(平) 正恒(平)　恒光(平)　恒次(平)　利恒(平)　真恒(平) 真利(平)　包平(平)　助平(平)　助包(平)　高包(平) 吉包(平)　信房(平)　高綱(平) ・一文字系　則宗(鎌初)　助宗(鎌初)　助宗(鎌中) 成宗(鎌初)　安則(鎌初)　延房(鎌初)　信房(鎌初) 宗吉(鎌初)　吉宗(鎌初)　吉家(鎌中)　吉平(鎌中) 吉房(鎌中)　助真(鎌中)　吉包(鎌初)　助包(鎌初) 吉用(鎌末)　吉元(鎌末)　長則(鎌末) 一(鎌初～鎌末) 吉岡助吉(鎌中)　助光(鎌末)　助茂(吉) 正中吉家(鎌末) ・長船系　光忠(鎌中)　景秀(鎌末)　近景(鎌末) 真長(鎌末)　長元(鎌末)　兼光(鎌末)　二代兼光(吉) 義光(鎌末～吉)　元重(鎌末～吉)　長義(吉) 長守(吉)　吉景(吉)　倫光(室初)　政光(吉) 盛光(室初)　康光(室初)　経家(室初)　家助(室) 祐光(室)　祐定(室)　勝光(室)　宗光(室)　清光(室) ・雲類　　雲生(鎌末～吉)　雲次(鎌末～吉)　雲重(吉) ・大宮系　盛景(吉～室)　盛重(吉～室) ・和気系　重助(鎌末) ・畠田系　守家(鎌中～吉)　真守(鎌末) ・直宗系　国貞(鎌中)　国宗(鎌中)	姫　　路 ・手柄山系　氏重(江) 岡　　山 横山上野大掾祐定(江)　河内守祐定(江) 加賀守祐包(幕)　祐永(幕)　辺見義胤(幕～明)
備　　中 ・青江派　守次(平～吉)　貞次(鎌初～吉) 恒次(鎌初～鎌末)　康次(鎌初)　延次(鎌初) 助次(鎌初～鎌中)　次吉(鎌末～吉)　次直(吉) 吉次(鎌中～吉)　直次(鎌中～吉)　長次(室) 正恒(平)　恒次(鎌) ・一文字派　則房(鎌中)　真利(鎌中)	備　　中 ・水田派　国重(桃～江)
備　　後 ・三原派　正家(鎌末～室)　正広(吉)　行吉(吉) 正光(吉) ・貝三原派　正真(室)　正清(室)	
安　　芸 ・左文字派　入西(鎌中)	
周　　防 ・二王派　清綱(鎌中～室)　清永(室)	広　　島 ・埋忠系　肥後盛輝広(桃)　二代播磨守輝広(江) 二王派新刀(江)
長　　門 ・左文字派　安吉(吉)　顕国(吉～室)	
山　陰　道	
丹　　波 ・粟田口系　国定(鎌中)	
但　　馬 ・法城寺系　国光(吉)　隼人国光(室)	
因　　幡 ・小鍛冶系　景長(鎌末～室)	

伯　　耆 ・大原系　安綱(平)　真守(平)　有綱(平)　安家(平) ・道祖尾系　広賀(室)	伯　　耆 ・道祖尾系　広賀(桃)
出　　雲 貞綱(吉～室)　貞末(室)　祥貞(室)	
南　海　道	
紀　　伊 ・簀戸系　国次(室初～室末)	和 歌 山 ・重国系　初代重国(桃)　二代重国(江) ・石堂系　康広(江)
讃　　岐 ・海部系　氏康(室)　氏吉(室)	
土　　佐 ・大和系　吉光(室初～室末)	高　　知 左行秀(幕)　朝尊(幕)
東　海　道	
伊　　勢 ・千子系　村正(室)　正重(室末)　正真(室末)	桑　　名 ・千子系　正重(桃～江)
三　　河 ・薬王寺派　助次(室末)　文珠派正真(室末)	名 古 屋 ・政常系　相模守政常(桃)　二代美濃守政常(江) ・信高系　伯耆守信高(桃)　二代信高(江)
遠　　江 ・高天神派　兼明(室)　高天神(室)	
駿　　河 ・島田系　義助(室)　助宗(室)　広助(室)	駿　　河 ・島田系　小十郎義助(江)
相　　模 ・国綱(鎌中)　国宗(鎌中)　助真(鎌中)　国光(鎌中) 国広(鎌末)　行光(鎌末)　正宗(鎌末)　貞宗(鎌末) 広光(吉)　秋広(吉)　広正(室初)　綱広(室末) 広次(室末)　康春(室末)	鎌　　倉 ・伊勢大掾綱広(桃)　綱広(江～幕) 小田原 ・八番山清平(江)
武　　蔵 ・下原系　周重(室末)　照重(室末)　康重(室末)	江　　戸 ・繁慶　繁昌 ・小笠原系　庄斎長旨(江)　二代長旨(江) ・下坂系　康継(桃)　同二代～四代代康継(江～幕) 近江守継年(江) ・虎徹系　長會弥興正(江)　同興正(江)　同興直(江) ・法城寺系　橘正弘(江)　同貞国(江) ・兼重系　上総介兼重(江) ・安定　大和守安定(江) ・石堂系　武蔵大掾是一(江)　同二代是非一(江) 石堂運寿是一(幕)　日置対馬守常光(江) 同出羽守光平(江)　同越前守宗弘(江) ・水心子系　水心子正秀(幕)　二代正秀(幕) 大慶直胤(幕)　次郎太郎直勝(幕)　細川正義(幕) 長運斎綱(幕)　固山宗次(幕)　泰龍斎宗寛(幕) ・清磨系　源清磨(幕)　豊前守清人(幕)　筑前守信秀(幕) 源正雄(幕)　山浦真雄(幕)
常　　陸 ・月山系　来源光(鎌末)	水　　戸 坂東太郎卜伝(江)　市毛徳隣(幕)　勝村徳勝(幕)
東　山　道	
近　　江 ・高木系　貞宗(鎌末)　甘露俊長(吉)　間露顕光(室)	彦　　根 ・一峯系　佐々木一峯(江)

美　濃 ・志津系　初代～三代兼氏(吉)　兼氏(室)　兼友(吉～室) 兼次(吉)　兼信(室)　兼国(室)　兼延(室)　兼貞(室) 兼之(室)　兼定(室)　兼元(室)　兼常(室)　兼光(室) 兼房(室)　氏房(室末)　大道(室末) ・金重系　金重(吉)　金行(室初)　金高(室末) ・千手院系　千手院(室)	関一類 ・兼定(江)　田代源一兼元(江)　その他
奥　州 ・舞草系　光長(室末)　森宗(室)　世安(鎌末) ・宝寿系　宝寿(鎌中～室) ・月山(吉～月山系室末)　軍勝(吉)　近則(室末)	仙　台 ・国包系　山城掾国包(桃)　二代山城守国包(江) ・安倫系　初代安倫(桃)
	会　津 ・三善系　政長(江)　長道(江) ・手柄山系　正繁(幕)
	山　形 ・水心子系　正秀(幕)　大慶直胤(幕)
	岩　代 固山宗次(幕)　泰流斎宗寛(幕)
北　陸　道	
若　狭 冬広(室末)	
越　前 ・千代鶴系　国安(鎌末)　守弘(室初～室末)	福　井 ・下坂系　安継(桃)　二代安継(江～末) 肥後大掾貞国(桃)　肥後大掾兼法(桃) 播磨大掾重高(江) ・堀川系　山城守国清(桃)　二代国清(江)
加　賀 ・則重系　真景(吉) ・加賀青江系　景光(室初～室末)　家次(室初～室末) ・藤島系　友重(吉～室末)　行光(室初～室末) 信長(室)	金　沢 兼若(桃)　二代兼若(江)　清光(江)
越　中 ・則重系　則重(鎌末)　二代則重(吉)　為継(吉) ・郷系　義弘(吉) ・宇多系　国光(吉)　国房(吉～室末)　国宗(室初～室末) 国次(室)　国久(室)	
越　後 ・桃川系　長吉(吉) ・山村系　正信(室初)　安信(室初) ・秦系　長吉(吉)　国行(吉)	
西　海　道	
筑　前 ・左文字系　入西(鎌中)　実阿(鎌末)　西蓮(鎌末) 左(吉)　安吉(吉)　行弘(吉)　弘安(吉)　吉貞(吉) ・金剛兵衛系　盛高(室初～室末)	筑前福岡 ・石堂派　守次(江)　是次(江) ・信国派　吉包(江)　吉政(江)　重包(江～幕)
筑　後 ・三池系　光世(鎌初～吉)　未三池(室) ・大石左系　家永(室)　良永(室)　教永(室)	
豊　前 ・長円(平)	
豊　後 行兵(鎌初)　平高田友行(吉)　同時行(吉) 平長盛(室)　平鎮教(室末)　平鎮盛(室末)	豊後高田 ・高田系　藤原行長(江)　統行(江)　貞行(江)

肥　　前	佐　　賀
・三池系　大村住光世(室) ・平戸左　盛吉(室)　盛重(室)	・埋忠系　初代忠吉(桃)　二代忠広(江)　三代忠吉(江) 四代忠吉(江)　五代忠吉(江)　河内大掾正広(桃) 二代河内正広(江)　土佐守忠吉(桃) 播磨大掾忠国(桃)　二代播磨守忠国(江) 伊予掾宗次(桃)　同二代(江)
肥　　後	熊　　本
・延寿派　国村(鎌末)　国友(鎌末)　国資(鎌末～室) 国泰(鎌末～室)　国信(鎌末～室) ・同田貫派　正国(室末)　上野介(室末)	・同田貫系　同田貫正国その他(桃～幕)
日　　向	
古屋実忠(室末)　国昌(室末)　国広(室末)	
薩　　摩	鹿 児 島
・波平派　行安(鎌初～室末)　安家(鎌末～室) 安行(室)	・伊豆守正房(桃)　主永正正清(江)　正近(江) 伯耆守正幸(幕)　正盛(江)　主馬首安代(江) 大和守元平(幕)　元武(幕)

五ヵ伝の作風と主要刀工

古刀期

古刀期の作風を時代、地域を通じて大別すると、おおよそ五つの大きな系統に分類できる。すなわち、山城、大和、備前、相州、美濃の五つの伝系である。これを五ヵ伝と称しており、別項に記載した時代による姿の鑑定と併せれば、だいたいの時代系統を判別することが出来る。

山城伝

地肌は小板目が細かによく詰んで地沸がきれいにつき、うるおいがある。特に、粟田口物の地鉄は日本刀の最高峰に迫るものである。

刃文は直刃、直刃ほつれ、直刃小丁子、小乱に足入り、小丁子乱、直刃丁子乱が多く、特に沸が見事で、地刃ともによく沸え、地景、金筋、稲妻、二重刃などの動きが豊に現出する。

帽子は浅く乱れ込み、返りの少ないものが多く、小丸、大丸、沸崩れ、焼詰、火焔がある。

彫物は素剣、梵字、護摩箸、腰桶などが多く、位置は地の中央に寄る気味がある。

山城伝系の刀工の最盛期は平安、鎌倉であり、相州伝の勃興とともに次第に哀退してしまって、室町末期の山城伝と称するものは全く山城伝の特色を失ったものである。刃沸や地沸の特徴も失われて中直刃で、帽子が小丸になることにわずかに面影を残しているにすぎない。

大和伝

大和鍛冶は日本刀製作にたずさわった最も古い刀工群の一つで、のちの日本刀の源流はここに発するといえる。ただ、古い時代の有銘確実な現存刀は皆無であり、わずかに残された正倉院の刀剣類、及び古千手院と称するものや、大和より分かれたと伝える薩摩刀の古波平の数少ない遺品によって、その作風を推しはかるのみである。鎌倉中期に至って大和鍛冶にも需要が増大し、相次いで千手院、手掻、当麻、尻縣、保昌などの各派が興って大和伝が再興された。

造込みは他国の同時代のものに比べて鎬地の幅が広く、また特に鎬が高く棟の重ねを薄く造る傾向があるので、実際以上に鎬が高く見えるものが多い。

地肌は板目に必ず柾目がまじり、特に保昌は柾目肌が揃うのが特色とされている。

刃文は中直刃にほつれ、小丁子、小乱、直刃に互の目足入り、小互の目乱あり、地鉄に柾目が強いので、地肌に沿って砂流しや掃掛、二重刃、喰違刃等の縦の働きが現れる。

帽子は刃文同様に、鍛えの柾目に沿って焼詰になるものが多く、返りはあってもさほど深くない。沸は各伝中最も強く烈しく、下部よりも上へ行くに従って強くなるのが特色で、従って,帽子は火焔、掃掛など強い沸がついて五カ伝中最も烈しいもので、大和の中でも特に当麻にこの特

色がはっきりあらわれる。
大和伝の特色も、これを色濃く残しているのは鎌倉末期までで、吉野朝期にはいると次第に特色が薄れはじめ、室町期にはいると沸もさほど強くなくなり、全くの匂出来のものも造るようになる。そして、わずかに地肌に柾目のまじることと、直刃であるのが特色として残るくらいになってしまった。

備前伝

備前は平安期の古備前より新々刀までつづいた日本刀の一大生産地である。作風は時代によって多少の相違はあるが、古刀期を通じての特色といえば、刃文が丁子刃で、地肌に地映りが出ることをあげることが出来る。
以下、時代順に作風を概観してみよう。
平安・鎌倉初期－刃文は小乱、小丁子で小沸出来になり、山城伝の同時代の他国の鍛冶とあまり異ならないが、次第に丁子乱が流行し始める。
鎌倉中期－大丁子乱が全盛で、匂出来になり地映りがあらわれて最も備前らしい刀が作られる。片山一文字には逆丁子乱、また助真、守家、光忠には蛙子丁子乱が見えられる。
鎌倉末期―大房丁子乱が影をひそめて、丁子乱も次第に小模様になり、直刃丁子乱や直刃に足入りの山城や備中の鍛冶と同様の刃文が多くなり、その他互の目があらわれて肩落互の目、丁子の互の目まじりがみられる。
吉野朝期―相州伝を加味した「相州備前」と称する沸出来の互の目乱が長義などの一部鍛冶にみられるが、一般的には兼光調の腰の開いた互の目丁子乱が多い。この時代の映りは鮮明な影映りはみられず、兼光に見られるような「牡丹映り」とよばれる断続したものが、棒映りに変わってくる。
室町期―腰開きの互の目乱か、互の目丁子が主流で、中直刃は広直刃に足、葉のはいったものもあり、いずれも匂出来である。また、帽子は各時代を通じて刃文が乱れであればそのまま乱込み、直刃であれば直刃になるが、長光一門には「三作帽子」といって、直刃でたるみ込んだ帽子が多い。地肌は板目に杢のまじった柔らかい地鉄で、各時代を通じて柾気がもっと少ない。また、未古刀の時代の注文打ちには小板目がよく詰んで、一見すると新々刀の無地鉄と見紛うほどのものがあって、映りの出ないものが多い。

相州伝

一般に、初期相州伝は山城から粟田口国綱、備前から国宗、助真が一門を引率して鎌倉に移住し、相州伝の礎を築いたとされている。しかし、私見では、その他に越中から則重が加って、硬軟の鉄をまぜ鍛える舞草、安綱の伝法を伝えて、これが相州伝の大板目肌に地景がからむ相州肌の基礎となり、また大和からの移住刀工によって沸の強さと沸が上にいくに従って強くなるという大和伝の特色が強調されて大和よりも、より強く残したもの一と考えている
初期相州伝は、鎌倉末期から吉野朝の初期にかかるもので、直刃小乱、小互の目、小丁子乱の焼幅の狭いものと、湾れ乱、大互の目乱で、焼幅の広いものとがあり、いずれも沸出来で、五ヵ伝中最も沸が荒くて強く、稲妻、金筋があらわれる。また沸が上へいくに従って強くなるので、帽子は沸崩れ、掃掛、火焔となり、焼詰になるか、反りが少ない。地肌は板目に地景がからんで地沸が強く、湯走りがあらわれるものが多い。重ねが薄くなると大板目が多くなってくる。棟は真の棟になるものが多い。
中期は延文、貞治頃を中心として、互の目大乱、湾れ乱、皆焼、沸出来で刃中に砂流しがかかり、稲妻、金筋があらわれる。焼出しの刃文は狭くて上へいくに従って刃幅が広く、沸も強くなって大模様で華やかになる。帽子は深く乱込んで返りもまた深いものや一枚帽子もあり、沸が荒くて乱れる。地肌は大板目で、地景が初期のものほど目立たくなってくる。棟は真の棟。彫りは棟に寄ったものが多い。
末期は室町期であって、相州伝の特徴が稀薄になってきて、他国の鍛冶との差が少なくなる。沸は叢沸になるか、または全くの匂出来になってしまうものあり、刃文も皆焼、互の目乱、湾れ乱に加えて直刃が見られるようになる。地肌も同時代の他国物と大差のない小板目、板目で、これに杢がまじるものもある。

美濃伝

美濃伝は鎌倉末期から室町期かけて、大和伝から分かれた鍛冶が主となり、これに他国からの

移住鍛冶が加ってできた伝系で、衰退した大和伝に代わって興隆して来たといえる。
その作風は本来の互の目乱が加わり特に互の目の頭が尖るのが特徴となっており、直刃を焼いてもどこか一ヵ所か二ヵ所尖りごころの小互の目となる。皆焼きの場合にも返りの途中に一ヵ所か二ヵ所尖り刃を焼く。
刃文は匂出来が主なであるが、叢沸がついたり、全くの沸出来のものもある。時代的に見ると、初期のものは沸出来で砂流しがかり、金筋、稲妻があらわれて互の目尖り刃を焼くものが多く、時代が下るに従って、沸出来の互の目に尖り刃の混じるものや三本杉、大湾れ、箱乱、中直刃、皆焼などを見る。
帽子は刃先に寄って返りが深い、いわゆる地蔵帽子(関物に多いので「関帽子」とも称)が多い。
地肌は板目に柾目になり、白気映りがあらわれるのが美濃伝の特徴である。

新刀期

新刀期にはいると古刀期のように五カ伝という伝系による区別が判然としない。これは、全国の刀工がほとんど共通の地鉄で鍛刀するようになったので、伝系による特徴が薄れてきたためである。けれども、刀は長い伝統のうえに立って造られているものである以上、どこかにその特徴を残しており、観点をかえれば、五カ伝は立派に生きているといわざるを得ないが、古刀と同様の見方の五カ伝による区分は適用しない。

山城伝

地鉄は古刀の山城伝とは全く異なり、小板目肌がよく詰んできれいな地肌となるが、肥前刀の如く肌目に地沸のつかないものと、大阪物のように地肌がつくものとがある。
刃文は末の山城伝のように中直刃は中直刃に小乱、互の目乱があり、いずれも刃幅が広く、小沸出来になる。乱れの刃文も、新刀、新々刀独特の大きなもので、古刀初期の如き小乱、小丁子などはあまり見ない。帽子は小丸となる。

大和伝

地肌は柾目か、板目に柾まじりになり、板目と杢目がまじって棟寄りが柾になるものあるが、いずれも鎬地は柾目になって鎬筋が高い。また、鍛え目に沿って地景の出るものと出ないものがある。
刃文は古作の相伝を狙った作風のものや、小沸か中沸出来の中直刃や直刃にほつれ、湾れ風に二重刃、喰違のあるものがあり、直刃に互の目のはいるものがあるがいずれも匂口が古刀とは異なる。帽子は焼詰も小丸もあるが、掃掛ごころとなる。

備前伝

地肌は小板目のよく詰んだきれいなものと、底に板目肌の沈んで見えるものとがあり、刃文は匂出来の丁子乱が腰開きの互の目丁子が多いが、小沸出来のものや拳形丁子で匂の締まったものもある。
一般に、長船物は祐定風の刃文を焼き、石堂系は一文字風の刃文を焼いて物が多い。また、大阪の中河内国助は匂の締まった拳形丁子で焼出しを直刃に焼くが、新々刀期にはいって長船系の鍛冶がこれを狙って作刀している。

相州伝

江戸期における相州物愛好熟の蔓延は著しいものがあって、他の伝法で鍛える刀工も少なからざる影響を受けている。
地肌は大板目肌に地景がからむものと、小板目の詰んだものとがあり、前者には繁慶のように極端に地景をみせるものと、南紀重国や康継のように比較的目立たないように処理したものとがある。また、関伝の鍛冶で相州伝に鍛えるものには柾目がまじる。
刃文は互の目大乱、湾れ乱、互の目乱で、新刀期の新しい相州伝風の刃文として濤乱刃が出現してきた。また、相州伝の専門鍛冶の作は、砂流し、金筋のはいるものが多く、沸は荒目で地沸、刃沸ともに多く、なかには地刃の境の判然としないほどのものまで見られる。一方、他の伝法でも鍛える刀工の相州伝風の作には沸は中ぐらいでおだやかなものが多い。

美濃伝

新刀期の鍛冶の大部分は室町末期から江戸初期にかけて、美濃から各地に分散、移住した刀工と何らかの関連を持っており、これら美濃伝系の鍛冶は時代の要求によって相州伝を加味した新しい鍛法を生み出して全国的に流行させ新刀期の主要刀工となった。新刀期の鍛冶の八割ほどはこの鍛法をとるか、または影響を受けている。

地肌は板目または板目に柾がまじるもの、小板目のよく詰んだきれいなものといろいろあるが、鎬地は必ず柾目になる。鎬地柾目は室町期以降変わらない美濃伝の特徴の一つとなっている。

刃文は互の目、互の目尖り刃まじり直刃、湾れ刃と種々あり、さらに未関風の匂の締まった互の目乱もあって一定しないが、匂出来か小沸出来のものが多く、荒沸のはげしいものは少ない。ただし、美濃、相州両伝を鍛えている刀工についてはこの限りではない。帽子は小丸が地蔵帽子の影響を残していて刃方へ寄る気味のものが多い。

新々刀期

山城伝

新々刀期の山城伝は、来国俊あたりを狙った肥前初代忠吉を範としたものがほとんどであって、地肌は小板目の詰んだ無地風となり、刃文は初代忠吉よりは更に刃中の働きがなくなり、単に小沸で匂の深い直刃になっている。

これらの直刃は相州伝の刀工も大和伝の刀工も焼いているが、沸が荒くて強いものは相州伝系、地肌が柾目になるものは大和伝系として分類する。

大和伝

地肌は保昌風に柾目の揃ったものが多い。

柾目は水戸の徳勝や月山貞一などは荒く、反対に細いのは会津兼定である。新刀期の大和伝には板目に柾まじりの肌があったが、新々刀期では、この肌目は大和伝系の鍛冶に少なく、左行秀や清磨一門にあるが、刃文は主として相州伝風の刃(まれに大和伝系の作るもある)を焼いているので、一応は相州伝の刀工として教えている。

刃文は直刃、直刃ほつれ、直刃に互の目足入りなどで、砂流しがかかったり、飛焼のあるものである。

備前伝

新々刀期の浜部一派による河内守国助を模した拳形丁子は、後期の備前祐包、祐永にひきつがれ、水心子正秀による古作の備前を狙った作風は、直胤や正義、宗次にうけつがれて、備前伝は相州伝についで新々刀期の大きな潮流となった。

地肌は小板目がよく詰んで無地風となり、刃文は丁子、互の目、腰開きの互の目丁子、拳形丁子などで、匂出来、小沸出来の両様がみられ、拳形丁子乱の刃文の場合は焼出しが直刃になり、匂が締まる。また、一文字及び長船を狙った刃文の場合には、小沸出来になるものが多い。

相州伝

新々刀期には、鎌田魚妙などがその著書で相州伝の津田助広、井上真改を新刀第一と賞讃したことや、新刀期から引き続いての相州物偏重とが相まって、前期は相州伝の濤乱刃の大流行を見、水心子正秀、市毛徳鄰、尾崎助隆、手柄山正繁などが盛んに濤乱刃を焼いた。後期にはいると、正秀の唱えた「刀剣復古論」の影響もあって、同じ相州伝でも、左行秀のように、沸出来で匂の深い直刃の江義弘や則重を狙ったもの、薩州物や清磨一門のように互の目に尖り刃がまじった乱で砂流しのかかった志津風のものと、いろいろ造られるようになる。

地肌は小板目のよく詰んだ無地風のものが殆どであるが、清磨や左行秀は底に柾目が沈むものが多く、薩摩物は大板目肌になる。

美濃伝

新刀期に繁栄した美濃伝の鍛冶も、美濃伝に相州伝を加味した作風であったが、新々刀期に至

ると美濃伝系の特色は影をひそめて相州伝系の面が強調されるようになる。美濃伝専門の鍛冶が殆ど見受けられなくなり、わずかに相州伝系のなかに、美濃伝面影を残すに過ぎない状態となる。
地肌は小板目のよく詰んだ肌に柾目がまじるか、細い柾目風の肌となった。鎬地は柾目が強い。

刀剣の種類

1、太刀
二尺以上の長さで、反が高く、刃を下にして腰に佩く形式のものである。中で二尺前後の短いものを小太刀と呼ぶ。原則として平安中期以降のものに始まり室町初期までの作刀である。桃山、江戸時代のものは特殊の場合を除いては太刀はない。

2、刀
現今の用語としては刀とは、二尺以上の長さで腰に指す形式のものである。室町時代に至って太刀が廃れて打刀を使用するようになった。打刀は二尺以上のものも二尺未満のものもあって、二尺以上のものが今日の刀であり、未満のもの脇指という。即ち室町時代から刀が出来、桃山、江戸時代のものは全部刀である。

3、脇指
一尺以上二尺未満の刀を脇指という。室町時代の打刀でこれに該当するもの、桃山、江戸時代に刀の添指としたものはすべてこれである。江戸時代の「大小」の小である。

4、短刀
一尺未満のものを称する。室町時代以前は単に「かたな」といえば今日の所謂短刀のことであった。

沸と匂　(刃文)

沸と匂も冶金学的に言えば全く同一組織であって冶金学的用語ではマルチテンサイトとかトルースタイトとか呼ばれている一番硬い組織を言う。その区別は沸は凝結の粒子の荒い部分で、その一つ一つの微粒子が肉眼でとらえ得るもののことであり、匂とは一つ一つとしては見えない細い微粒子のことである。これ等が刃をすかして見ると秋の夜空に輝く星のようにきらきらと輝いて見えるものが沸であり、ぼっと霞んで天の川を望むような感じのものが匂である。
沸は刃の部分にあるばかりでなく地にもつくことがあってこれを地沸という。沸がつながって一本の線となり刃中にきらりと美しく光って見える場合を短いものを金筋、長くやや太いものを稲妻と呼び、同様のものが地の中にある時は地景という。又沸が一部に業がりかたまっているものを湯走と称する。これ等は所謂地刃の働きであり平安時代、鎌倉時代のものは地刃ともに沸勝ちであるところから沸出来と称する。その反対に沸が少なく匂本位のものは匂出来という。これ等は前述のように時代的の相違いもあり、又系統的にも特色として認めることが出来る。これを分類すると次のようになる。

1、沸出来の作風を示すもの
(1)平安・鎌倉の作刀全般、(2)大和系及び、(3)大和系統のもの(二王、宇多、波平、三池等)、(4)山城物古刀・新刀を通じて全般。(5)相州物及びその系統のもの。(6)室町末期の備前物一般。(7)桃山・江戸を通じて新刀の大部分。

2、匂出来の作風を示すもの
(1)鎌倉中期以降の備前物一般。(2)吉野時代の備中青江物一般、(3)室町時代初期から中期の備前物の大部分、(4)新々刀の特殊のもの

刀剣の歴史

一般年代	年　　号	刀工年代	刀工分類
縄文時代　～　飛鳥時代			
奈良時代	大化元年(645)　～　延暦 12 年(793)	上古時代	
平安時代	延暦 13 年(794)～寛和 2 年(986)　【前期】	上古時代	
	永延元年(987)～寿永 2 年(1183)　【後期】	平安末期	古刀
鎌倉時代	元暦元年(1184)～承久 3 年(1221)　【初期】	鎌倉初期	
	貞王元年(1222)～弘安 10 年(1287)【中期】	鎌倉中期	
	正応元年(1288)～元弘 3 年(1333)　【末期】	鎌倉末期	
南北朝時代	建武元年(1334)～明徳 4 年(1393)	吉野時代	
室町時代	応永元年(1394)～文正元年(1466)　【初期】	室町初期	新刀
	応仁元年(1467)～天文 23 年(1554)【中期】	室町中期	
室町時代～桃山時代	弘治元年(1555)～文禄 4 年(1594)　【末期】	室町末期	
江戸時代	慶長元年(1596)～寛永 20 年(1643)【初期】	慶元新刀期	
	正保元年(1644)～延宝 8 年(1680)　【中期】	寛文新刀期	
	天和元年(1681)～享保 20 年(1735)【中期】	元禄新刀期	
	元文元年(1736)～宝暦 13 年(1763)【後期】	刀工受難期	
	明和元年(1764)～享和 3 年(1803)　【後期】	新々刀前期	新々刀
	文化元年(1804)～慶応 3 年(1867)　【幕末】	新々刀後期	
明治時代	明治元年(1868)～明治 44(1911)	現代期	現代刀
大正時代	大正元年(1912)～大正 14(1925)		
昭和時代	昭和元年(1926)～昭和 63 年(1988)		
平成時代	平成元年(1999)～現在		

平安時代　延暦 13 年(794 年)～寿永 2 年(1183 年)

延暦１３年恒
武天皇が平安宮に遷都されてから、源頼朝が建久年（1192 年）鎌倉に幕府を開くまでの 398 年を平安時代というが、刀剣史では平安時代を大同元年（806 年）よりとしているものが多い。これは古来伯耆の安綱の年代を大同頃としていたために区切りとして都合がよかったからであろう。平安時代を二つに分けて前期と後期に分類する。

＜前期＞　延暦 13 年(794)～寛和 2 年(986)
この時代も前時代に引き続いて蝦夷征討が国内的に最も重要な課題であり、数次にわたる蝦夷の征討を通じて戦闘方法に変化をきたし、刀剣も直刃から彎刀に変化する過渡期にあたる。
すなわち延暦 7 年(788)の第一回蝦夷征討軍の成果が殆どなかったので、恒武天皇は武器を全国で製造させ、強兵を養成するとともに、従来の歩兵の変わりに騎兵を準備したと伝えられているが、おそらく、蝦夷軍に騎兵があったために第一次の征討軍の成果があがらなかったための対抗策ではなかろうか。このようにして 4 年の準備期間を経て、延暦 13 年(794)の第二回制夷軍、更に坂上田村麻呂を蝦夷大将軍に任じた延暦 16 年(797)の第三回征討軍によって陸奥と出羽の両国が結び付けられるようになったので、騎馬の効果が大いに認められるようになる。次第に騎馬戦が行われるようになると、使用する刀剣も従来のような直刃では騎馬のスピードに対応することが不可能となり、刀を馬上から使用した場合の強烈な反動を軽減するために刀身に反りをもたせるように変化してくるのであるが、これは独り日本刀のみではなくて、世界中の刀剣に共通している発展過程である。
このようにして前時代の直刃から進化したもの代表ともいうべきものが、鋒両刃造りの直刃か

ら変化した小鳥丸に代表される鋒両刃造りの彎刀であり、更にこれに蝦夷の影響をうけて進化したものがその後に出現した毛抜形太刀である。いずれも直刃から現在の日本刀の太刀姿に移行する過渡期の形態である。

毛抜形太刀の名称は、茎の透かし模様が毛抜の形に似ているところからつけられたものだが、のちに衛府太刀の目貫にその形を遺したものが製作されて、やはり毛抜形太刀と称されている。

毛抜形太刀の原型と考えられるものに蕨手刀があり、奈良時代前期から平安時代の初頭にかけて、関東、東北、北海道方面で製作されたものといわれている。正倉院にも一口伝来しており、平泉の中尊寺に伝わる悪路王の刀は蕨手刀の進化したものであり、いずれも蝦夷の鍛冶によって製作されたもので、数度にわたる蝦夷軍との交戦によって、完成途上にあった日本刀に強い影響を与えたことがうかがわれる。

毛抜刑太刀の体佩は、刀身自体の反りは少ないが、鎺元でぐっと倒れているために全体としての反りが高く、鋒は甲冑の道具外れを刺突できるように小鋒になっており、完成された初期日本刀の体佩と殆ど変わらないぐらいに改良されてはいる。ただ相違いをあげると、鎬幅が広く、そのために鎬筋はまんなかよりわずかに棟によったぐらいで、この点は前期切刃造りの直刃と大差がないし、重ねも直刀とあまり変わらない厚さである。大きな変化は鎬筋が高くなってきており、単なる切刃造りを脱して鎬造りに変化していることで、このために同一の重量であっても著しく強度を増やしている点に注目しなければならない。

この期の現存品としては、直刀では第二次蝦夷征討軍坂上田村麻呂の佩用と伝えるものが鞍馬寺に所蔵されており、鋒両刃造りの彎刀は平家重代の小鳥丸が皇室御物として現存している。毛抜形太刀は、伊勢の神宮司庁に、天慶2年(939)反乱を起こして関東八カ国を支配下においた平将門を討った下野の押領吏藤原秀郷の佩用と伝えるもの、春日神社の藤原一族の奉納と思われるもの、竹生島宝厳寺の秀郷奉納と伝えるものなどが知られている。

この期の鍛冶としては伯耆の安綱を大同頃としてあげているが、貴存品から見ればこの期の末から永延頃にかけての製作になるものである。その他確実な作刀は見当たらないが、天国、天座、神息などの剣工団も鍛刀していたであろう。

＜後期＞永延元年(987)～寿永二年(1183)

この期は前期までの貴族政権が、荘園の私領化によって実力を養ってきた在野の新興武士階級を御しきれなくなり、源平二氏が武士階級の二大勢力として併立、ついには武士が従来までの貴族にかわって政権を執るに至った時代であり、このような「刀」の時代を背景に、その主要兵器である日本刀が全国的な規模で長足の進歩をとげたのは当然である。

前期の末におこった承平、天慶の乱(935～941)を境として、騎馬が戦闘の主力となるに及んで、防御兵器の甲冑が、重量の制約がゆるめられて鉄や皮の小札を糸や皮をもっておどした堅固なものに急速に変化してきたので、従来の重ねの薄い直刀形式の肉どりの刀ではこれを断ち切ることが出来ないため、堅物切りに適した新しい肉どりが要求されるようになった。一方では戦闘の規模がだんだんと大きくなってくると、長時間の使用にも耐えられる重量であることも必要となり、これらの要求を充すために、鎬筋を高くして棟寄りによせて、刃肉をたっぷりとつけて堅物切りに都合よくする反面、鎬地は棟へかけて不要の重ねを削りとって刀身の強度を増やすとともに重量の軽減を計り、同様の目的から、元の身幅に比較して先身幅が極端に狭い踏張りの強い小鋒の太刀姿になってきた。反りは前期の毛抜形太刀のように、馬上からの斬撃に反動を少なくするため鎺元で倒れるような腰反りで、反対に物打から上は、馬上からの刺突の便のために無反りとなっているので、一見すると物打から先が鋒へかけて倒れるような感じをうけるものである。

長さは二尺五寸から七寸位が普通であるが、これは当時の馬は小形の日本馬で、馬体の大きさから考えると馬上対馬上、馬上から徒歩の打合いに最も適した寸法であったものとおもわれる。

刃文は小乱が主なで古雅な感じが強く、また技巧的な匂いのする華やかなものはうまれていない。

短刀の遺品は、厳島神社に友成の在銘が一口あるのみで、これも惜しいことに再刀で正確な原形は不明である。

この期の刀工は時代を永延頃と伝えている山城の三条宗近をはじめ、伯耆の安綱、備前友成、正恒、豊前の長円など全国に渡っており、需要が全国的に広まってきたことを示している。

鎌倉時代　元暦元年(1184)～元弘３年(1333)

建久３年(1192)源頼朝が征夷大将に任ぜられてから、元弘３年(1333)鎌倉幕府の滅亡までの間を鎌倉時代と呼ぶが、従来の刀剣書では時代を元暦とする鍛冶が多いので、元暦をもって時代の区分としている。政治史上でも文治元年(1185)壇ノ浦の戦で平家は滅亡しており、その前年である元暦元年に木曽義仲が征夷大将に任じられて、事実上源氏の時代になっているので、本書でも元暦元年から元弘３年までを鎌倉時代として区分し、更にこれを初期、中期、末期の三つに細分した。

＜初期＞　元暦元年(1184)～承久３年(1221)

源頼朝が京都の公卿政権に対抗する政権として鎌倉に幕府を開いて武士階級を支配しようとしたが、事実上は東国を支配するにとどまり、公武二元支配の状態となった。そして頼朝が歿すると京都では反幕府勢力が強くなり、この機運に乗じて後鳥羽上皇は北面の武士のほかに新たに西面の武士を新設し、社寺と提携して武芸を奨励するともに、刀剣の鍛造などについても承元２年正月京都政権の支配下の諸国に令して鍛冶を集め、御相手鍛冶の月番を定めて自らも焼刃渡しをした。これらの御相手鍛冶を「承元の御番鍛冶」といっている。このような後鳥羽上皇の京都政権による完全支配権の奪還今運動に対し、朝廷の妥協を心かけていた三代将軍源実朝が、承久元年(1219)北条氏にそそのかされた二代将軍頼家の子公暁によって鎌倉鶴岡八番宮において暗殺され源氏が滅亡すると、頼朝の妻政子の血縁につながる北条氏が執権として幕府の実権を握り、公武二体の対決は承久の乱(承久２年)の幕府側の勝利となって結着がつき、後鳥羽上皇以下はそれぞれ配流されて、幕府が全国的な政権を確立するに至った。

このような公武二つの政権の抗争と鎌倉府内の内紛とが全国的に刀剣の需要を喚起し、併せて後鳥羽上皇による承元の御番鍛冶の拳が諸国の鍛冶を刺激して、刀剣の製作技術が空前の発達を遂げるに至った。

この期の刀剣は平安後期に完成した初期日本刀の上品な太刀姿から、鎌倉中期の剛健な太刀姿に移行する過渡期にあたる。反りは前期のように鋒元でいきなり倒れるような感じがなくなり、鋒元から少し上に反りの重心が移行した腰反りの太刀姿に変わり、鋒も小鋒ながら前期のものに比べるとやや大きくなり、それにつれて元身幅と先身幅の差が少し縮まって全体的に強さを増やしてきており、刃文も技巧的な小丁子乱を焼くようになって華やかさが目立ちはじめてきた。

＜中期＞　貞応元年(1222)～弘安10年(1287)

承久の乱によって全国支配の基礎を固めた鎌倉幕府は、貞永元年(1232)「御成敗式目」とよぶ武家法典を制定して、京都朝廷の律令に対する武家階級の法典を持つことによって武家階級の統治がその手にあることを、はっきりと天下に示したのである。

このようにして北条氏による執権政治が確立すると鎌倉は武家文化の中心地となり、武士の必需品である刀剣の需要も大きく、この需要に応えるために山城から粟田口国綱、備前からは備前三郎国宗、福岡一文字の藤源次助真などが一族を引率して移住し、また各地からこの新興地に刀工が集まって、鎌倉は鍛刀の一大中心地となるに至った。

この期の太刀姿は豪健な武家文化を反映して、前記にその兆があった強さ一層強調した姿で、反りは腰反りでありながら前期よりは反りがやや浅くなり、腰反りから笠木反りに移行する兆が見てとれる。

身幅は広くなり、元身幅と先身幅の差が少なくなり、鋒は猪首鋒となって、刃肉はたっぷりとついた蛤刃となり、頑丈な大鎧を断ち切るにふさわしい造込みである。刃文は備前、山城を主なとして華麗な大房丁子乱があらわれて流行した。

この期から全国的に短刀が製作されるようになり、その内でも粟田口吉光は次期の来国後、新藤五国光とならんで短刀の三大名手の第一教えられている。寸法はだいたい八寸前後で、身幅は広目のものと狭いもの両方があり、反りは内反りが多いが、これは元来はまっすぐに造られていたのがたびかさなる研ぎによって内反りに変わったものとも考えられる。

薙刀もこの期以降に多く見られるようになり、鎌倉時代の絵巻物に見られるような、先が張って極端に曲がったものと、反対に先がさほど張らなくて菖蒲造りのような造込みで反りもあまり高くない品のある姿のものとの両様がある。前者の多くは無銘で茎仕立ても粗末なものが多く、下級武士の使用品と考えられ、後者の場合は製作が優秀で、有名工の在銘品が多い点からも上級武士の使用したものと考えられる。この造込みの違いは、それぞれの用途の差によるものであろう。

＜末期＞　正応元年(1288)～元弘３年(1333)

前期の末、蒙古の世祖クビライがわが国にたびたび朝貢をうながしたが幕府はこれを拒絶したために、蒙古軍は文永１１年(1274)と弘安４年(1281)の二度にわたって来襲した(文永の役・弘安の役)。この両役がわが国の戦闘方法に与えた影響はまことに大きなものがあった。

従来までの戦闘は一騎討ちの個人戦が主体であったのが、蒙古軍はいきなり多人数で押しつつんで討ち取ってしまう集団戦で戦うのであるから、当時の武人に与えた衝撃の大きさは大変なものであったろう。

欧亜にわたる大遠征で幾多の新しい戦闘方法を体得した蒙古軍がわが国の戦闘方法に近代的な集団戦を導入するという置土産を残して去ると、戦闘方法の変化は直ちに主要兵器の変化に直結して、まず活動に便利なように大鎧の小札が薄くて小形なものとなり、全体に軽量化して、やがて胴巻が多用されるようになり、次第に腹巻へと移行していく。

防御兵器の変化に伴って刀剣も、大鎧を断ち切るための太刀姿から軽量化していく甲冑にあわせて、まず刀の刃肉が少なくなると共に便利なように鋒が延びてくる。また集団戦が移入された影響で、反りが前期の腰反りから笠木反りといわれる中間反りに変化してきた。この過渡期の太刀姿は、一見すると鎌倉初期の太刀姿に似ているものがあるが、鋒が延びてきているのと反りが中間反りに移行し始めているので容易に区別できる。最末期になるとこの変化が次第に極端になり、刀身の重ねが薄くなってそのために強度が減じた分は身幅を広く造ることによって補うようになり必然的に大鋒となり反りを減じて、いわゆる大段平造りへと変化していく。次代の吉野朝期において大佩が完成するのであるが、この変化の中心となったのは、武家文化の中心地鎌倉に各地から参集して鍛刀していた新興相州鍛冶であり、吉野朝期にかけて相州鍛冶の全盛期を迎えることになる。

刃文は華麗な大丁子乱が少なくなり、次第に地味な直刃丁子や直刃に足入りなどに変化してきて、かわって互の目乱や湾れ刃が出現した。相州伝系の鍛冶はこれらの刃文を好んで焼き、次第に大規模なものへと変わってゆくようになる。

短刀も前期に引き続いて盛んに製作され、前期の終わりからこの期にかけて流行したものに柄曲りの腰刀がある。その名の示すように柄が馬手指として使用したために極端に曲がっており、刀身の短刀の茎もこれにあわせて茎の曲がった振袖茎の短刀が作られたり拵にあわせて茎を曲げて改造したりされたものがあるが、一時的な流行で、吉野朝期にはいると殆ど見られない。短刀の反りは内反りから次第に無反りのものへと変化していき、最末期になると身幅が広く寸法も延びた反りのあるものがあらわれるようになる。特異な例としては越中の則重が極端な内反りの短刀を造っており、内反りの格好が箭の形に似ているので箭反りと呼んでいる。

吉野朝時代　建武元年(1334)～明徳４年(1393)

後嵯峨天皇歿後、第一皇子の後深草天皇系の持明院統と第二点皇子の亀山天皇系の大覚寺統にわかれて皇位の継承を争ったが、文保２年(1318)後醍醐天皇が即位されると院政を廃して天皇親政に復するとともに、討幕を計り、ついに元弘３年(1333)鎌倉幕府は滅亡し、後醍醐天皇は隠岐から京都に還幸され、持明院統の光厳天皇を廃して公家の政治にかえされた。これを建武の中興というが、新政に不満を抱く武士の支援によって足利尊氏が挙兵するに至って、建武の中興はわずか２年余りで終わり、南北両朝の対立した動乱期に入り、元中９年＝明徳３年(1392)に南北両朝が合体するまでのほぼ６０年間を南北朝時代とも吉野朝時代ともいっている。

鎌倉時代末期の元寇によって近代的集団戦を経験させられたために戦闘方法も急速に変化した。まず甲冑が集団戦に便利な活動的な胴丸が一段と広範囲に使用され、上級者を除けば胴丸着用が普通の状態となり、腹巻も次代に多用されるようになってきた。また前時代の末頃から製作されるようになった中間距離の刺突に便利や鑓が戦闘に加わるようになると、歩兵の騎兵に対する攻撃力が飛躍的に増大し、その結果、騎兵よりも徒歩部隊の多い部隊編成へと変わってきた。そのため、刀も元寇の影響で集団戦に適し体佩に変化しつつあったのが戦闘方法の急変に応じて一大変化を遂げるようになる。つまり従来までの切るという動作よりも、なぎはらうという点を重視した、中間反りで身幅が広く重ねの薄い大鋒で三尺前後もある大太刀が出現するようになった。この太刀姿を吉野朝体佩とか、また延文、貞治頃に最も多くみられるので延文貞治体佩とかよんでいる。

また、なぎはらうといった目的に沿った武器として薙刀も盛んに製作されるようになった。

短刀は身幅の広い、重ね薄で中間反りの一尺から二尺二寸前後の大振りの平造り小脇指が多く製作されている。

刃文は互の目乱、湾れ乱が主力を占めているが、皆焼刃がはじめて焼きかれるようになった。
吉野朝も最末期頃になると極端な大太刀は影をひそめ、尋常な太刀姿のものか、一見すると室町期の片手打の打刀と錯覚するような二尺一、二寸ほど小太刀が製作されている。

室町時代　応永元年(1394)～文禄４年(1595)

明徳３年＝元中９(1392)南朝の後亀山天皇が北朝の後小松天皇に譲位をされる形で南朝両朝の合体が成ってから慶長に至る約２００年の間を、足利氏の室町幕府滅亡後の安土・桃山時代をも含めて室町時代とよんでいる。

＜初期＞　応永元年(1394)～文正元年(1466)
足利尊氏によって創設された足利幕府も三代将軍義満の代になってようやく安定し、短期間であるが平和が続いた。
古来武器は、戦乱が終った平和時において発達するのが通常であり、刀もこの例外でなく、吉野朝の戦乱を通じて騎兵より歩兵へと部隊編成の主力が移ってしまったので、従来は太刀の指副えとして使用していた打刀が徒歩には便利なため、次第に多用されるようになり、太刀が廃れて、打刀を腰に指すのが普通の状態へと変化してきた。
この期は太刀から打刀へ移行する過度期にあたり、応永、永享頃は太刀の製作がまだ打刀よりは多く、吉野朝未に作られ始めた元身幅に此して先身幅の狭い尋常な姿で鎌倉末期の太刀姿を想わせるものが作られているが、鎌倉末期の太刀姿と比較すると、先反りがついてきているので区別される。
この期も終りの寛正頃になると、製作されるのは殆ど打刀のみで太刀は全く見られなくなり、完成に打刀の時代に移行してしまったことを示しているが、この期の打刀にはまだどこかに小太刀の面影を残しているものが多く、これも過渡期の特徴であろう。
短刀は寸法が九寸前後で身幅の狭い無反りのものと、一尺から一尺三寸位で身幅のやや狭い先反りのものがあるが、応永頃から後者の平造り小脇指に鎬をたてた鎬造りの脇指が造られるようになってきた。

＜中期＞応仁元年(1467)～天文 23 年(1554)
応仁の乱によって始まるこの期は、戦国時代ともよばれる時代であり、足利将軍家の権威の失遂が、全国的に下剋上の風潮となって戦国大名の出現を促し、織田豊臣二氏によって天下が統一される室町末期まで全国に戦乱の絶え間のない時代である。
戦闘方法は完全に徒歩戦が主力であり、従って甲冑も防御よりは攻撃性に重点をおいた身軽な腹巻が主流であり、胴丸を着用するのは一部の上級武将に限られた。刀も屋内の戦闘にも便利な二尺二寸前後で元身幅と先身幅の差の少ないがっちりした片手打ちの先反りの刀が流行している。
短刀はやや幅広の先反りのものと、屋内にて刀を手離した場合の護身用として懐中にしのばせる懐剣で寸法が六、七寸位の小握りでふくらの枯れた内反り短刀の元重ねが厚く先重ねの薄い刺突に便利なように造られたものと、両刃の懐剣があり、これらは懐剣としての特異性から、拵をかさばらないで丈夫にするため柄の部分に補強を要しないように茎を長く造るので、刀身に比較して茎の長さが異様に長く感じられるものである。
この期以降の特色として、うちつづく戦乱のために刀鎗の需要が多くなり、精良な注文打ちだけでは需要に応じ切れないために、「数打ち」とよばれる粗製の大量生産品が製作されるようになった。
中間距離の刺突に抜群の威力を発揮する槍は、騎馬に対しても、徒歩戦においても重要な兵器であり、鉄砲が主力となるまでは、この槍が下級兵士の主戦武器として重用され、製作も急激に増加している。
この期の終り天文 12 年(1543)にポルトガル人によってわが国に鉄砲が伝来され、以降の戦闘方法や武器に一大転換を強いることになる。

＜末期＞弘治元年(1555)～文禄４年(1595)
天文１２年(1543)鉄砲が渡来した当時は、命中度が低く、かつ装弾に時間を要するなどの点で、単なる威嚇のために使用する程度であったのを、織田信長がこの欠点を補う方法として三列の鉄隊を組織して順次発射次第、後列に退いて装弾するという方法を創案し、その結果、天正元年

(1573)長篠役における戦闘で当時国内随一をほこっていた武田の騎兵隊を潰滅させるに及んで、わが国の戦闘方法は一変するに至った。

従来までは集団戦とはいいながら各部隊の部隊長が陣頭にたって働き、個々の部隊長の強弱の差が戦闘に際して大きな戦闘的な差異として評価されていたのがまったく無意味となり、それに伴って騎兵が無力化して、鉄砲隊を主力とした歩兵の集団戦が代わって戦闘の主力となってきた。そして従来まであまり重要視されていなかった足軽が軍事力の中心となる近代戦へと脱皮してきたために、集団戦法による機動性を高めるために、戦国大名の家臣が城下に居住するようになって城下町の発達を促し、そのため城そのもの山城から平地の城へと移ってきた。

甲冑も従来までの小札でできた胴丸や腹巻では隙間が多く、鉄砲や槍で傷つけられることが多いため、隙のない一枚の鉄砲でできた素懸や切符札の具足が流行するようになり、南蛮胴のように堅固なものがあらわれてきた。そのため、刀もこれに対応して寸法の延びた重ね厚さの丈夫ながっちりした造込みの刀が造られるようになり、片手打の刀は廃れてきた。

天正元年織田信長によって足利義昭が京都から追放されて足利氏が亡び、信長歿後、天正１８年(1590)豊臣秀吉によって天下統一が達成され、長い戦乱の時代が終った。

江戸時代　慶長元年(1596)～慶応３年(1867)

織豊ニ氏によって天下統一の業成った後をうけて政権を担当した徳川家康によって、中央集権的封建制とこれに伴う身分制度が確立され、政治が安定して平和が持続された。各大名の城下町は政治経済の中心となり、また参勤交代制度や商品流通の活発化によって海陸の交通路が整備発達すると、刀工も原料鉄の入手が容易で製品の需要が多い有力大名の城下町に住んで鍛刀するようになり、大名もまた戦時の武器確保を目的として、これを保護するようになった。

慶長を境として製作された刀剣は原材料の均一化、技術交流の活発化及び製作上の変化などの理由から、前期までの製作刀とは顕著な差異が認められるので、慶長以前を古刀、以降を新刀と区別し、更に江戸時代を新刀期と新々刀期に区別している。

＜慶元新刀期＞　慶長元年(1596)～寛永 20 年(1643)

この期を美術史では桃山時代として分類する場合もあるが、理由は桃山文化の影響がこの期に顕著であるということであり、同様の理由から南北朝を鎌倉期に編入することもある。刀剣史は一方の南北朝は明らかに鎌倉期と区別しており、また桃山期なる語は政治上の安土桃山時代とまぎらわしいので、本書では刀剣界で古くからよびならわされている慶長・元和時代をあらわす慶元体佩にならって「慶元新刀期」として分類することにした。

この期は戦国時代とこれに続く関ヶ原役、大阪冬陣、同夏陣の反省期であり、これらの豊富な経験に基づいて最も効率的なものとして製作されたのが、吉野朝期の大太刀を徒歩戦に都合の良い寸法に磨上げた刀にならった、幅広で元幅と先身幅の差の殆どない大鋒の反りの浅い豪刀である。本歌の吉野朝のものに比較すると、相違点は重ねがわずかに厚いことと、刃文が桃山の影響をうけて大互の目乱で沸づいた相州伝風の派手なものが多いことであろう。

脇指、短刀もやはり刀と同様に吉野朝期にならった豪壮なものが多く、これらには刀と違って先反りの極端に強い、まるでひっくりかえりそうな体佩のものを多くみうける。

このような体佩のものは多く慶長、元和頃に製作されたので、慶元体佩とよばれている。

寛永年間になり元和偃武より遠ざかるにつれて、実戦の経験のない武士が増え、幕府の武断政治の影響とあいまって、次第に剣術が流行するようになった。竹刀で稽古することによって、突くということの利点を発見し、指料の刀も寛永の中頃から、この目的に沿った反りが少なく、先身幅の狭い小鋒の刀姿へと移行し始めるようになった。

＜寛文新刀期＞　正保元年(1644)～延宝８年(1680)

江戸幕府創立以来三代にわたって幕藩体制を強化するためにとられた武断政治のひずみとして、巷には扶持をはなれた浪人が多くなり、慶安４年(1651)家光が歿するとともに油井正雪の討幕計画となってあらわれたが、その後も平和時にありながら戦時編成のままの不必要な人数を整理することも出来ない武士階級がでて一種の社会不安がおこった。扶持を離れた浪人は新しい仕官先に売込む為に剣術を売物にするようになり、一層剣術が流行し、ためにこの期の刀は前期末からの変化が一段と強調されて、元身幅に比較して先身幅の狭い小鋒で極端に反りの浅い刺突に最も適した刀姿のものが流行した。これを寛文新刀体制と呼んでいる。

正保２年(1645)７月１８日幕府によって大小刀の寸法その他が制定され、短刀は武士の必需品

から外されたため、以後全国的に短刀の製作が激減し、新々刀後期になって需要品が出てくるまでの間製作はまれである。
寛文新刀体佩も地域差があって、特色が最も顕著にあらわれているのは幕府の膝元の江戸刀工であり、影響のもっとも少ないのが肥前刀で、中間に位するのが大阪新刀といえる。
刃文は簾刃が完成され、つづいて濤乱刃や珠数刃があらわれてくる。江戸刀工の地味なのに比べて、天下の台所を以て任ずる大阪では、助広の濤瀾乱れのように華美なものが好まれ、江戸と大阪の都市の性格の相違がはっきり示されている。
延宝頃になり、幕府の文治政策の影響があらわれ始めると同一刀工の作刀でも体佩にやや優しさを増やすものがあらわれて、刀剣の時代の流れに対する敏感をあらわしている。

＜元禄新刀期＞　天和元年(1681)～享保 20 年(1735)
幕府の勧農政策によって農業が発進し、それに伴って流通機構や商業組織が整備されて都市化が進むと、商品作物の栽培が活発化し、これを扱う商人による蓄財が進んだ。そして厳重な身分制度にしばられている商人は金の使途を遊興に求めるようになり、ために華美の風が一般化し、元禄風とよばれる世相を出現した。
このような政治下に享保元年(1716)紀州家からはいって八代将軍となった吉宗は、文治政策を改めて武断政治によって士風の振興を図った。その一環として、享保４年(1719)老中久世大和守重之に命じて諸大名から領内の鍛冶名を書き出させ、同 6 年諸国の代表工を江戸の浜御殿に召し出して鍛刀させた。そして、薩摩の正清、安代、筑前の信国重包、紀州の四代重国には茎に一葉葵の紋を切ることを許し、特に優秀であった正清、安代に対しては受領のあっせんをするなど、刀工奨励策を執った。しかし、それにもかかわらず、時代の流れを変えることは出来ず、一時的な鎮静的しかなかった。
この期の刀は元禄の華美をそのままにあらわした優しい刀姿へと変化しており、先身幅と元身幅の均衡のとれた、ころあいのものとなり、反りも深くなって全体的に優しいが目たち、刃文にも極度に人工的な技巧を凝らした「住吉」や「富士見西行」などがあらわれてきた。
このような時代であっても、一部には剛健な造込みを好む者もあって、これらの注文を受けた刀工は、一見すると慶元体佩と見紛うような体佩のものを造っている。とくに尾張関の鍛冶にその傾向が強いのは、将軍継嗣問題に端をはっした反幕府の気風が尾張藩にあったことも影響してことであろう。

＜刀工受難期＞　元文元年(1736)～宝暦 13 年(1763)
この期は産業、商業の発達にともなって商人による蓄財が著しい反面、武士階級はあいかわらず戦時編成のまま多数の武士を扶持し、一方では泰平の世相が奢侈を誘うので、定まった年貢によっている財政を圧迫するのは当然であった。この危機を脱するために、大名は家臣にたいする半知値上げと称する実質上の扶持の削減と豪商からの大名貸しという借金政策にたより、その結果を年貢の増徴によって切り抜けようとして、次第に幕藩体制は崩壊に向かっていた。
このような時代では、武士も武芸より財政手腕のある者が重用され、これに加えて武士階級の因窮化から刀工に対する新規の注文は途絶して、多くの鍛冶が野鍛冶に転向し、わずかに幕府や藩から扶持を受けて生活を維持することが可能な抱え鍛冶のみが刀匠として残ったにすぎない刀工の受難時代であり、作刀ははなはだ少ない。
作風は前期とほぼ同様であって、基本的な変化はないが、まれに注文するのは武芸に熱心な武士が多く、それらの注文主は自分の流派や好みにあわせて注文したので、がっちりとしたものや反りの少ないものもある。

＜新々刀前期＞明和元年(1764)～享和３年(1803)
明和から明治維新までの間に製作された刀剣は、地鉄が無地風の、俗にいう新々刀地鉄とよばれるべっとりした鉄が多く、新刀期の作刀とは異なるので、この期の刀を「新々刀」とよんで区別している。
新々刀の前期になると凶作と飢謹が相次いで百姓一揆を誘発し、一方武士階級の内部で尊皇論が強くなってきたのに加えてロシアやイギリスが相次いで来航してわが国に通商を求めるなど、世の中は物情騒然となった。そのため刀の注文も増えて刀工も鍛刀が可能な状態になり、各地に優秀な刀工が輩出して門弟を養成するようになったので、再び隆盛に向かいつつあるのがこの期である。
刀は前期の姿から優しさが次第に消えてゆき、身幅が増やし、自然と鋒も延びごころとなって強さがでてきはじめた。

刃文は当時人気のあった相州物上位や大阪新刀の助広、真改を狙ったものが多く、一般に華麗ではあるが、地鉄が新々刀独得の無地風のきれいなものが殆どである。
短刀の製作はようやくみられるようになったがまだ多くない。

＜新々刀後期＞　文化元年(1804)～慶長３年(1867)
この期のはじめ文化、文政頃は、天災も少なく比較的平和な時代で、刀も前期のものと変わらず、目立った変化はあらわれていないが、天保に入ると諸国に飢饉がつづき、特に天保７年(1850)の大飢饉による窮乏はついに大阪における大塩平八郎の乱となり、一方外国からは黒船が来航して開国を迫り、内外ともに動乱の時代に突入した。
この時代を反映して幕府は天保の改革で武芸を奨励し、刀工では水心子正秀が文政９年(1826)年その著『刀剣武用論』を刊行して、刀剣の復古主義を唱えたので、鎌倉、吉野朝の太刀姿の刀が流行した。特に天保以降は吉野朝期の磨上げ物にならった慶元体佩の刀が流行し、脇指、短刀もやはり鎌倉、吉野朝期の作刀に習ったものが多く、一部に小振りの懐剣も造られている。
地肌は前期と同じく無地風のきれいなものが多いが、一部の刀工には古作を狙った研究のあとがうかがえる。
刃文は備前伝か相州伝を狙ったものが全盛である。
明治維新に近い最末期になると、一部の浪士や旗本の間に勤皇刀と称する無反りに近い大段平造りの刀に講武所拵とよばれる拵えをつけるのが流行した。一方おなじころに各藩の洋式調練も一段と盛んになり、そのために指料も活動に便利なように、二尺二寸前後やや小振りな刀身に、とっべい拵式のズボン指とよばれる初期軍刀様式のものが次第に多くなり、次の明治初年はこれが主流となる。

現代　明治元年(1868)～現在

慶応３年(1867)２６５年つづいた徳川幕府は終りを告げ、翌年明治天皇即位し、明治と改元した。
新政府は各藩に版籍奉還を命じ、新たに府県制をしいて中央政府の直轄下に置き、身分制度を撤廃して四民平等に改めるとともに、徴兵制をとって政府直属の兵制に改めた。これに付随して明治３年、庶人の帯刀を禁じ、つづいて明治４年散髪廃刀を許し更に明治９年佩刀禁止を発して一般人の帯刀の習慣に止めを刺し、帯刀できるのは軍人、警官に限られるようになった。それに加えて近代国家に脱皮するための洋風尊重のいきおいが旧物打破につながり、刀剣類は無用の長物視され、この時期に刀剣等も他の美術品ともに多く海外に流出し、刀工も廃刀令とともに需要が激減したため、殆どの刀工が生計を維持できずに転廃業に追い込まれた。
この期の作刀は注文主の軍人、警官の佩刀がサーベル式の外装であるために、刀身もそれに応じた身幅の狭い応永頃の太刀姿を小振りにしたような姿のものが多い。
昭和になって満州事変を契機として日華事変、太平洋戦争へと進展し、軍刀の需要が増大したため、限られた刀匠ではこの需要に応ずることが出来ず、末期には『昭和刀』と称する鍛錬しない軍刀が造られるようになった。
昭和２０年の敗戦によって刀剣類は所持、製作を禁止され、廃刀令につぐ刀匠の受難時代となった。しかし、その後美術刀剣の所持が可能になりつづいて昭和２７年の講和条約締結の翌２８年には日本刀の製作が許可されて、日本刀製作の伝統はかろうじて消滅することを免れた。
８年間の雌伏からたち上がった刀匠たちの精進はまことにめざましいものがあり、その後２０年を経過した今日の作刀技術は完全に戦前の水準を越えて新々刀期の一流刀工に迫るものもでてきている。
現在の刀剣の体佩は実用面からの制約がなくなったため、展覧会場の効果を考慮した大振りのものが多くなってきている。なかには刀身が太刀姿で茎が刀茎というつり合いのとれない刀もあるが、これなど実用の裏付けのない悲しさとでもいうのであろうか、現代刀の体佩はまだしばらくは動揺しつづけ、やがて自らの体佩を決めるであろう。

協　　力

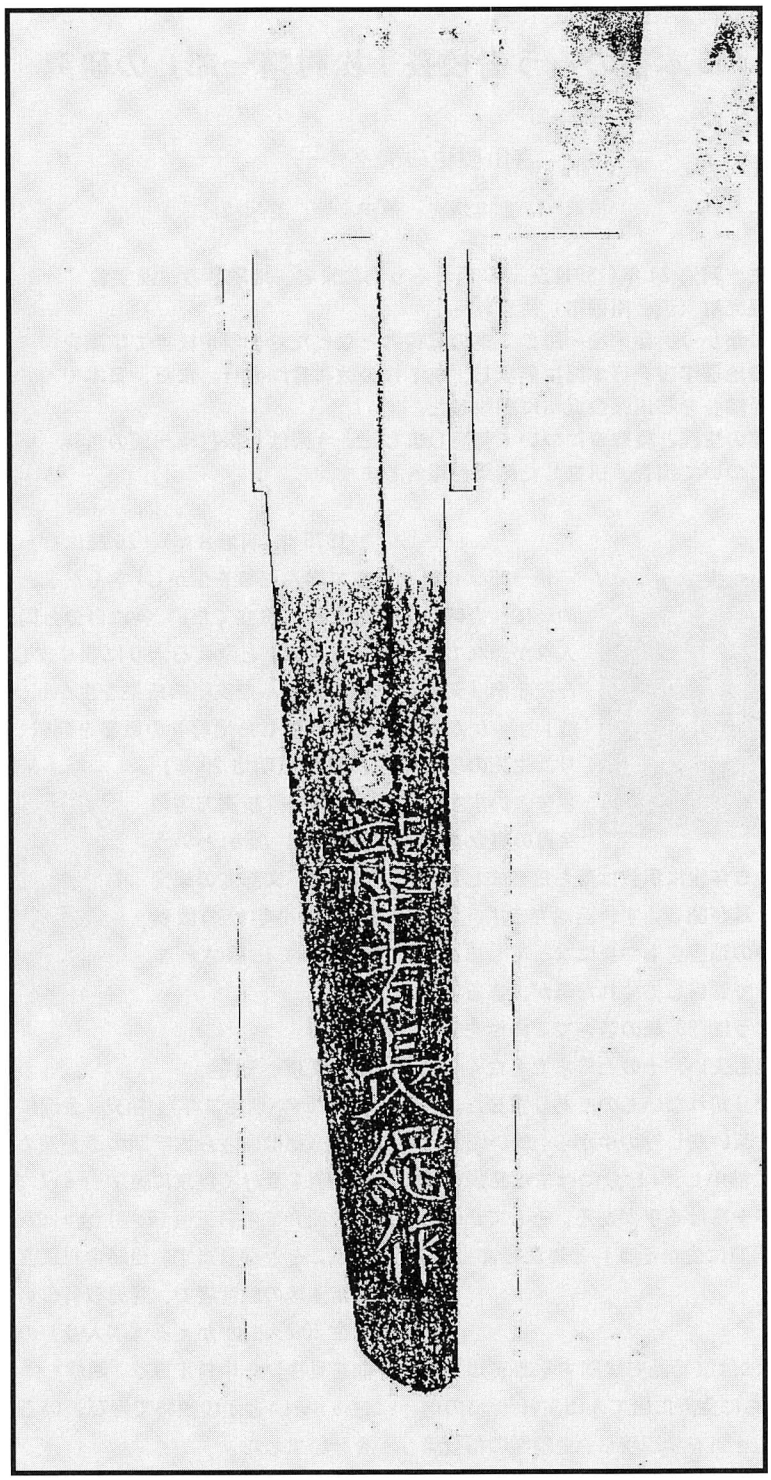
(財)日本美術刀剣保存協会・調　査　課　檜山正則
(財)日本美術刀剣保存協会・熊本県支部　山田晴比古
刀剣研究会霜華塾・講　　師　佐藤氏
刀剣研究会霜華塾・塾　　長　山田良一　山田たか子

参考文献

刀剣鑑定手帖	(財)日本美術刀剣保存協会	佐藤貫一	昭和３０年
普及新版・日本刀事典	美術刀剣研究家	得能一男	平成１５年
鑑刀秘書	日本美術刀剣保存協会・熊本県支部	山田晴比古	平成１７年
新刀古刀大鑑(新刀編)		川口渉	
古今鍛冶備考・７冊	試刀家	山田淺右衛門吉睦	文政１３年
大阪新刀図譜		中宮敬堂・好郎	昭和４２年

古今鍛冶備考

参考文献：古今鍛冶備考・７冊



銘文：聾者長綱作
資料：大阪新刀図譜